

発達に違いのある子どもたち

市では、「障がいのある人、ない人にかかわらず　だれもがいきいきと安心して暮らせるまちづくり」を基本理念としてさまざまな施策を取り組んでいます。

今回も、市内で子どもの発達支援に取り組まれているNPO法人「まいすてっぷ」から、発達に違いのある子ども達について市民の皆さんに正しく理解していただるために、寄稿していただきました。

『発達性読み書き障がい（発達性ディスレクシア）』（後編）

読み・書きが困難であるディスレクシア。その困難さの要因はシンプルなものではありません。読むためには字の形を認識する、文章の文字を目で追う、文字を目で追いながら音に変換する、書かれている意味を理解する、また書くためには、考えを音に変換する、音を文字に変換する、文字を運動出力に変換する、ペンや鉛筆などの道具を使いこなす、マス目や行の幅に合わせて大きさやバランスを調整する、文字を正しい形に配置する、などの機能を必要とし、ディスレクシアの子どもはそのどこかにつまずいています。

ディスレクシアの子ども達の多く

は、失敗を繰り返し、他のみんなにはできることができない劣等感を持っています。でも、それは子どもではないはずです。「近眼」と聞けば「眼鏡」というように、「ディスレクシア」と聞けばその子に合った「学び方」の選択ができるようになれば、子ども達はどんなに生きやすくなるかわかりません。自分の置かれた状況を理解し説明することが難しい子ども達のために、周囲に発信したり、子どもが必要とする合理的配慮を学校に求めていくことも大切なことです。

家庭で必要な支援は幾つかあります。ですが、気をつけなければならないのは、子どもが読み・書きが苦手であるがゆえに文字から遠ざかってしまう、2次的障がいとして「じい不足」になってしまふことです。「じい不足」はさらに読み・書きを困難にします。

このような悪循環に陥らないためには、周囲の大人がゆっくりと読み聴かせることも大切です。同じ本を用意し、大人の読み方を真似して読んだり、慣れてきたら一緒に音読したり、文章が表す物語を楽しみながら過ごす家族とのひと時が、今後の苦難を超えていくエネルギーとなるかもしれません。

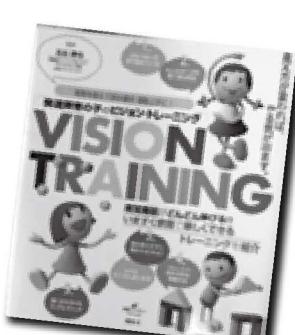
読み・書きにつながる練習方法

ディスレクシアの人が持つ困難の要因は一人一人違っています。だから単純に「これをすれば治る」といふものではありません。大事なことは、読み・書きが苦手なことを「悪いこと」と捉えないように、自己肯定感を育んでいくことです。

読み・書きに影響のある要因の一つは視覚機能の問題です（視力ではありません）。寄り目（輻輳）をする、ゆっくり追視をする、素早く移動するものを目で追うなど、自分の意思で眼球を動かすことが難しい場合があります。ゆえに、音読、黙読時に

参考文献

- ・読みなくとも、書けなくとも、勉強したい　ディスレクシアのオレなりの読み書き／井上智・賞子／ぶどう社
- ・発達障害の子のビジョン・トレーニング　北出勝也／講談社



発達障害の子の
ビジョン・トレーニング



パソコンソフト
「しっかり見よう」

ソフト「しっかり見よう」などもあります。

読み・書きは苦手だけど、子どもがやりたいと思うことを、どうせ自分は：と思わずトライできる環境、自分が苦手なところは遠慮なく「手伝ってください」と言える環境、

本人だけががんばるのではなく、周囲の人々が理解して近づいていくことで、その子の人生は大きく変わっていくことと思います。